

# 藤原宮大極殿院の調査

—第205次

## 1 調査の経緯と目的

大極殿院は藤原宮の中心部に位置し、周囲を回廊で囲まれた東西約120m、南北約165mの空間である。その中央には即位や元日朝賀などの儀式の際に天皇が出御する大極殿がある。

大極殿院については、戦前に日本古文化研究所（以下、古文化研）が大極殿、大極殿院南門、回廊の部分的な調査をおこない、復元図を作成している<sup>1)</sup>。奈文研は古文化研の復元案を検証するため、1977年度に大極殿北方（藤原宮第20次）、大極殿院西門（藤原宮第21次）の調査を実施した。近年は大極殿院の全容解明を目的として、回廊ならびに内庭の調査を継続的に進めており、2001・2016年度に東門および東面回廊（第117次・190次）、2007年度に南門（第148次）、2009年度に南面回廊（第160次）、2017年度に回廊東北隅（第195次）、2018年度に北門および北面回廊（第198次）の調査を実施してきた。これらの調査により、大極殿院各門の規模と構造があきらかになるとともに、大極殿院内庭は最終的に礫を敷いて整備されていることが判明した。さらに、2019年度には、東面回廊を取り付く大極殿後方東回廊を発見し（第200次）、藤原宮大極殿院と前期難波宮内裏前殿区画との類似性が強まる成果を得た。

上記の調査成果を受け、今回の調査では、東面回廊のうち大極殿後方東回廊より北方の規模と構造の解明、ならびに大極殿院内庭における建物の有無などの確認を目的として、大極殿院東北部に、東西43m、南北35m、面積1,505m<sup>2</sup>の調査区を設定した。調査区北部は第195次調査区、北西部は第198次調査区、南部は第200次調査区と一部重複しており、新規発掘調査面積は1,232m<sup>2</sup>である。調査期間は、2020年5月25日から11月26日までである。

（鈴木智大）

## 2 既往の調査と基本層序

**古文化研の調査区** 今回の調査区は、古文化研が1935年度におこなった高殿における発掘調査のうち、第四区と重複する<sup>2)</sup>。今回の調査では、まず床土をやや掘り下

げ、古文化研の調査区を検出し、その上で、埋戻土を取り除き、当時の遺構検出状況を確認した（図101）。

古文化研の調査では、東面北回廊の棟通りおよび東側柱通りに近い位置で、東西幅約3.0mの南北に長い布掘り状のトレンチを掘削し、そこで根石を確認している。さらに、その根石の東西に別途、布掘りや壺掘りのトレンチを設定し、調査を実施している。西側の壺掘りトレンチなどでは根石が検出されなかったことから、調査報告書では東面回廊を単廊として報告しているが、調査区の設定位置などをみると、複廊あるいは梁行2間以上の建物である可能性を追究していたことが読み取れる。

古文化研は、北面回廊との取付部も含めた東面北回廊において、合計14ヵ所で東西に並んだ根石を確認したと報告しており、これらにもとづき、柱間の広狭があるとしつつ、東面北回廊の柱間は桁行約12尺5・6寸（約3.8m）、梁行約9尺8寸（約3.0m）であると報告している。今回の調査では、後述する通り、そのうち8ヵ所（合計16基）を再検出した。

（福嶋啓人）

**基本層序** 基本層序は、上から、表土、史跡整備にともなう盛土（厚さ0.1～0.8m）、鴨公小学校建設・移転にともなう攪乱土（厚さ0.4～0.7m）、旧耕作土・床土（厚さ0.2～0.5m）、藤原宮廃絶後の瓦堆積（調査区東部のみ）と続き、その下層が藤原宮期の遺構検出面となる。床土のなかでも、瓦堆積の直上付近は、回廊の基壇土由来と考えられる淡赤褐色粘質土が堆積していた。藤原宮期以前の基本層序は、上から礫敷（内庭部）、回廊基壇造成後の整地土（最終整地土）、回廊基壇土、藤原宮造営時の整地土（第二次整地土）、藤原宮造営前の整地土（第一次整地土）、地山の順である。最終整地土は、回廊基壇造成後に施された整地土で、黄褐色・黄橙色・暗褐色砂質土などからなり、東面北回廊基壇の西方と、調査区の南辺および北辺付近に広がる。この整地土は、南に隣接する第200次調査の整地土②（『紀要2020』）、北に隣接する第195次・198次調査区の整地土B（『紀要2019』）に相当する。

第二次整地土は、先行条坊側溝を覆う藤原宮造営時の整地土で、褐色砂質土などからなり、調査区の全域に広がる。第200次調査区の整地土①、第195次・198次調査区の整地土Aに相当する。今回の調査では、調査区北辺付近において、第二次整地土の直下に部分的に凝灰岩粉が分布することを確認した。

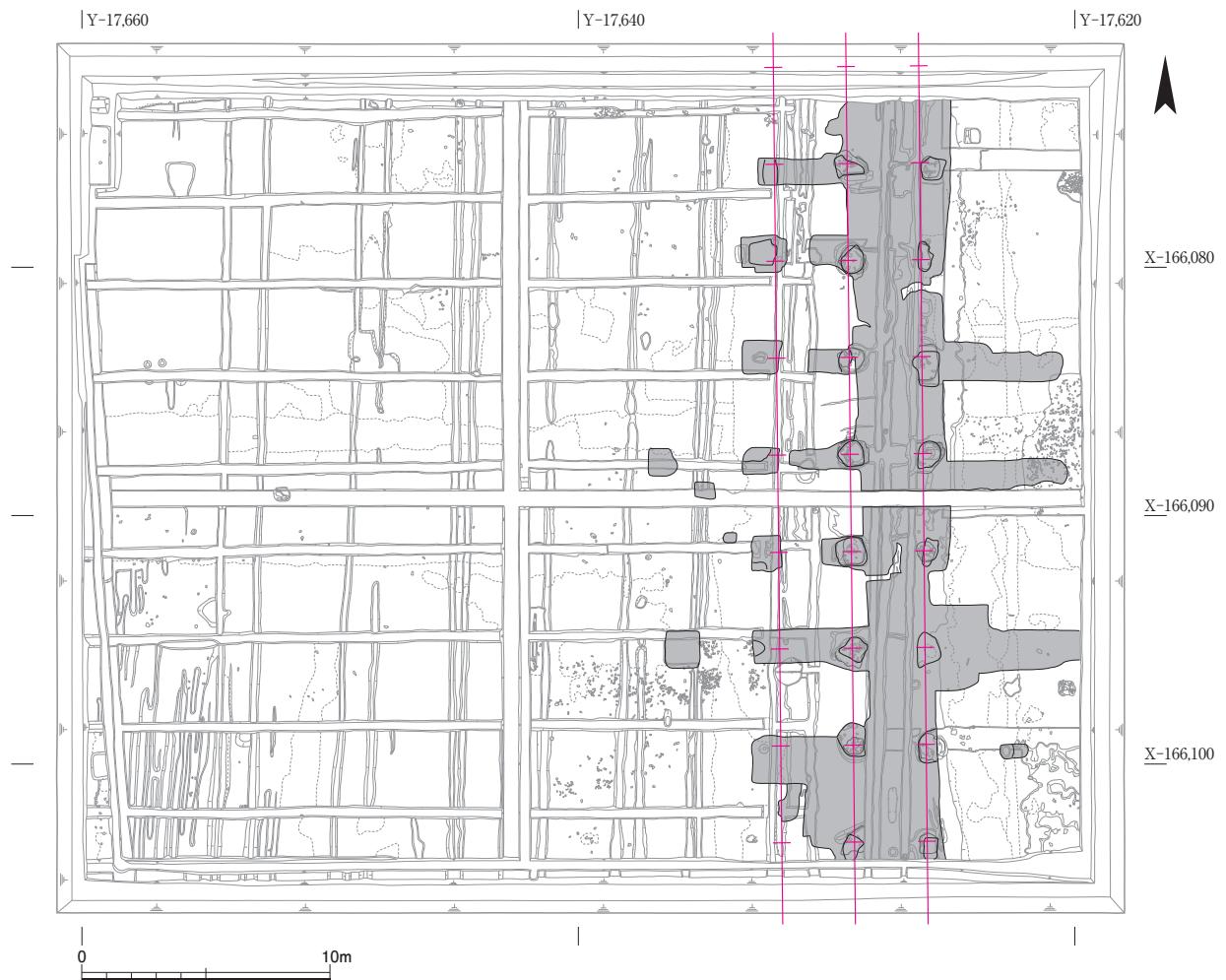


図101 日本古文化研究所の調査区の検出状況 1:300

第一次整地土は、先行条坊側溝の基盤層で、藤原宮造営前の整地土および堆積層である。暗褐色砂質土や黒褐色砂質土などからなり、調査区の全域に広がる。第一次整地土の一部は、第195次・198次調査の暗褐色砂質土に相当する。また、地山は灰黄色シルトや灰色粘土などからなる。

(鈴木・若杉智宏)

### 3 検出遺構

今回の調査では、上述の通り、はじめに床土を若干掘り下げ、古文化研による調査区を検出して、その調査区内の埋戻土を除去し、当時の遺構検出状況の記録を作成した。続いて、床土を全て除去し、瓦堆積を検出して、その状況および範囲を記録した上で、これを取り除き、礫敷および整地土などの上面において遺構検出をおこなった。その後、宮造営とともになう溝や先行条坊に関連

する遺構の解明を主な目的として、一部に下層調査区を設定し、遺構検出をおこなった。以下、時代の古い順に主な遺構について述べる(図102)。

#### 藤原宮造営前の遺構

**南北溝SD11595** 調査区西端付近で確認した素掘溝で、幅2.0m、深さ0.8mである(図104)。遺構の重複関係からみて、後述する先行四条条間路南側溝SD2075・東西溝SD11596より古い。埋土からは、古墳時代の土師器・須恵器が出土した。

**先行四条条間路北側溝SD2076・南側溝SD2075** 調査区北部で確認した東西方向の素掘溝で、先行四条条間路の両側溝である(図103)。第20次調査で検出した2条の東西溝の東延長部分にあたり、溝の心心間距離は6.8m。北側溝SD2076は調査区壁面などの土層断面で確認し、幅2.0m前後、深さ0.8m。南側溝SD2075は、調査区西辺

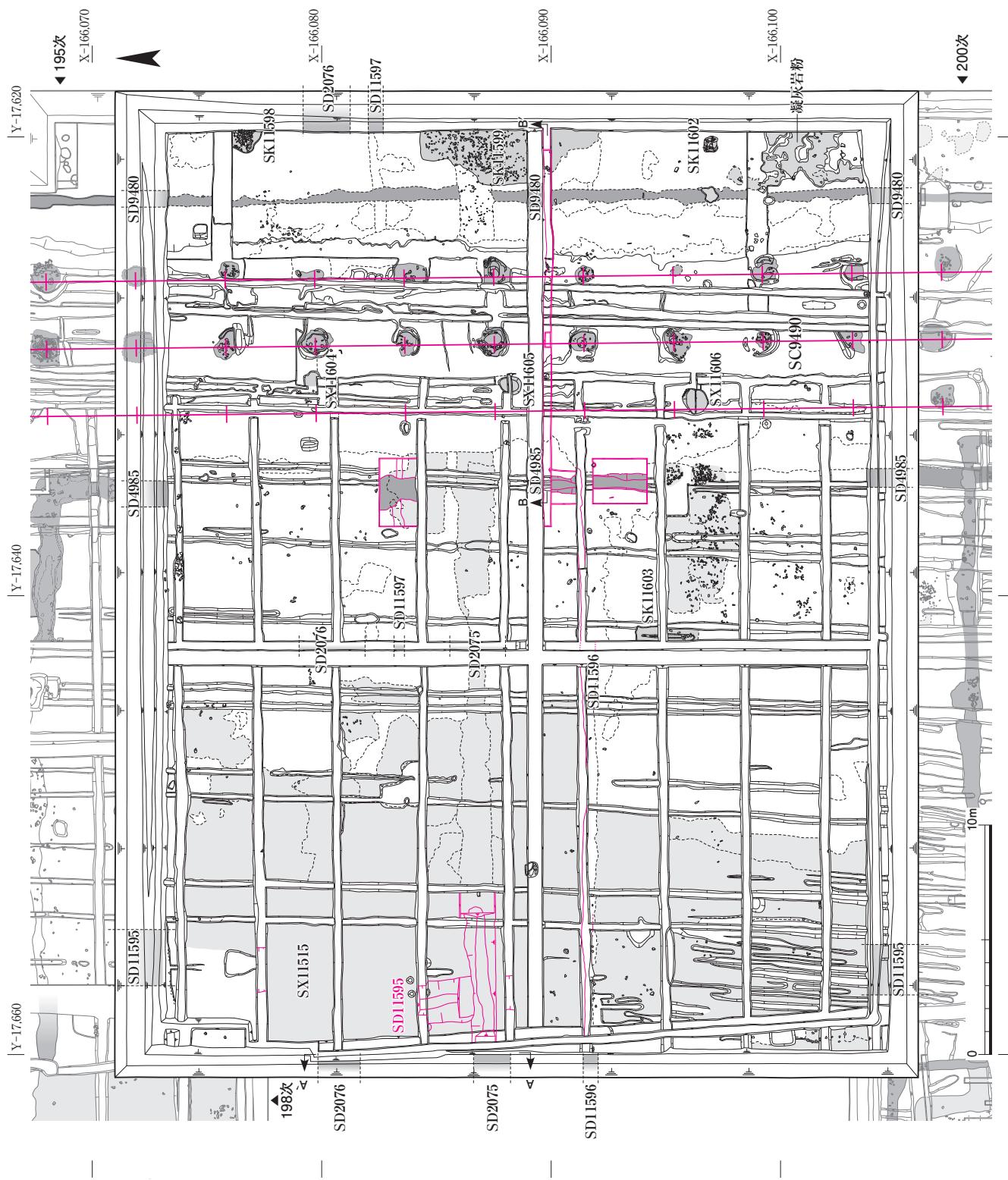


図102 第205次調査区遺構図 1:250 (図中矢印は図103・105の断面位置を示す。)

付近に設けた下層調査区で東西5.6m分を平面的に検出した(図104)。溝の南肩は後世の削平により失われている部分が多いが、幅は2.0mほどで、深さは0.8m。藤原宮の造営に際し、これらの側溝は埋め立てられたが、南側溝の部分は埋立土が沈下し、上層の整地土・礫敷・瓦溜が落ち込んでいた。

**東西溝SD11596** 調査区中央南寄りで確認した素掘溝で、幅0.7m、深さ0.4m。西側は調査区外へのびるが、

東側はY = -17,634.0付近で浅くなりとぎれる。

#### 藤原宮造営期の遺構

**東西溝SD11597** 調査区北部において、第二次整地土の上面で確認した素掘溝で、幅0.6m、深さ0.3mである。東側は調査区外に続くが、西側はY = -17,643.0付近でとぎれる。重複関係から、後述する南北溝SD9480・SD4985より古い。

**南北溝SD9480** 東面北回廊東側柱通りの3m東方で

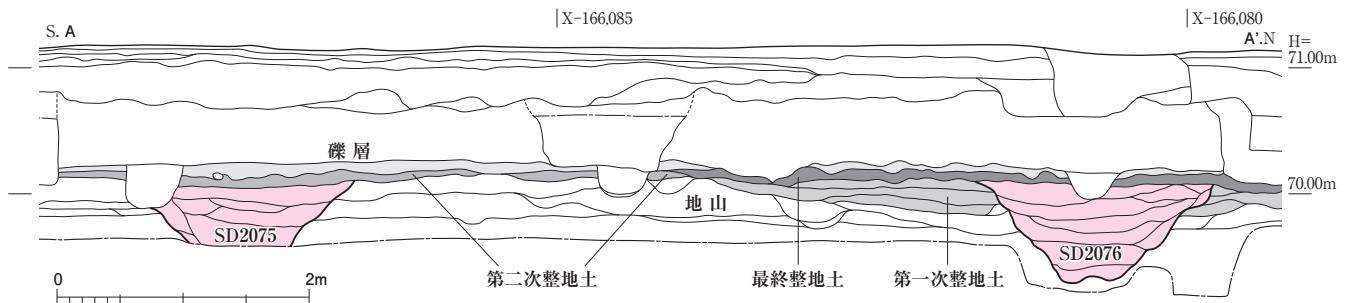


図103 先行四条条間路北側溝SD2076・南側溝SD2075土層図（調査区西壁） 1:60

検出した素掘溝で、幅1.1m、深さ0.2mである（図105）。第195次・200次調査でも確認しており、両者をつなぐ30.5m分をあらたに検出した。溝底の標高は、調査区南辺で70.0m、調査区北辺で69.9mであり、南から北へと緩やかに傾斜する。

**南北溝SD4985** 東面北回廊棟通りの6m西方で検出した素掘溝で、幅1.0m、深さ0.4mである（図105）。第195次調査で確認した南北溝SD4985の南延長部分であり、第200次調査のSD11535につながる。今回の調査で、両者をつなぐ30.5m分をあらたに検出した。溝底の標高は、調査区南辺で70.1m、調査区北辺で69.8mであり、南から北へと緩やかに傾斜する。

**土坑SK11598** 調査区の東北部で検出した土坑で、南北1.3m以上、東西1.4m以上、深さ0.4mである。藤原宮廃絶後の瓦溜SX11502に覆われる。埋土は黄灰色砂質土・灰色粘質土などで、多量の瓦が出土した。大極殿院造営の際の廃棄土坑と考えられる。

**土坑SK11599** 調査区東辺の中央付近で検出した土坑で、南北7.9m、東西2.8m以上、深さ0.5mである（図107）。藤原宮廃絶後の瓦溜SX11502に覆われる。灰色粘質土を中心とした埋土から、瓦・木屑・凝灰岩片が多く出土した。大極殿院造営の際の廃棄土坑と考えられる。

**土坑SK11602** 調査区東南部で検出した土坑で、南北0.6m、東西0.8m、深さ0.3mである。藤原宮廃絶後の瓦溜SX11502に覆われる。埋土から多量の瓦が出土した。大極殿院造営の際の廃棄土坑と考えられる。

**土坑SK11603** 調査区中央の南寄りで検出した土坑で、南北2.7m、東西1.0m以上、深さ0.6mである。第二次整地土の上面で検出した。埋土は暗褐色粘質土・青灰色粘質土などで、瓦が多く出土した。大極殿院造営の際の廃棄土坑と考えられる。

**杭SX11600・SX11601** 東面北回廊基壇の下層で検出した木製の杭である。SX11600（図109）は、今回の調査区内における北から2番目（X = -166,080.0付近）の回廊棟通りの礎石据付穴の断割調査によって、SX11601（図105・106）は調査区中央にある東西方向の土層観察用畦

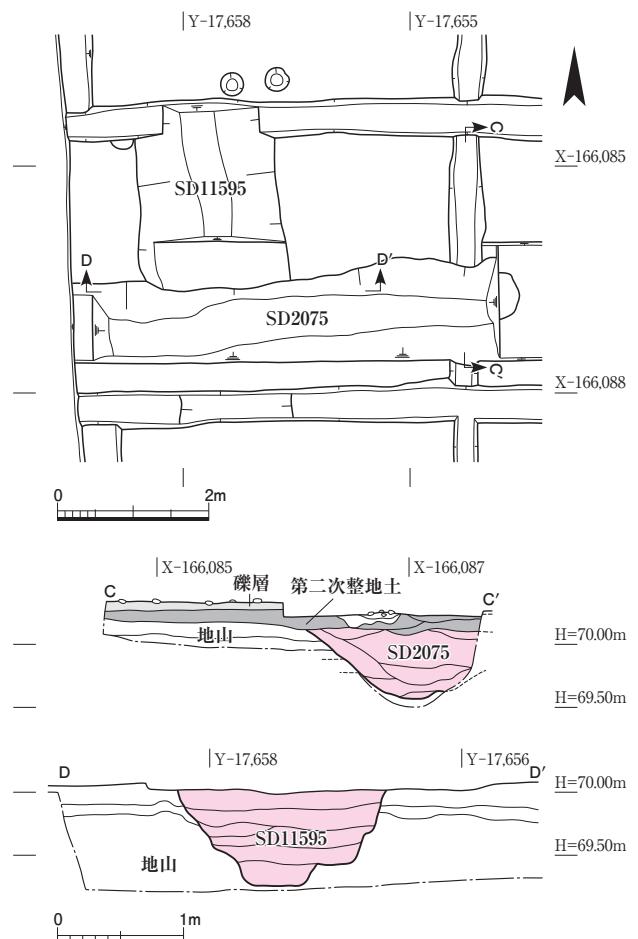


図104 南北溝SD11595・先行四条条間路南側溝SD2075  
遺構図 1:100・土層図 1:60

南側の断割調査（X = -166,089.7付近）によって確認した。両者とも上端は基壇土底面付近で折損していた。これらは藤原宮造営時に打ち込まれて、回廊基壇造営の際には杭上部が折り取られたと考えられ、その上に基壇土が積まれていったとみられる。2本の杭は9.7m離れており、これらを結んだラインは、東面北回廊棟通りにほぼ一致する。以上のような検出状況や位置を踏まえると、これらの杭は大極殿院回廊の位置を設定する際に使用された基準杭であった可能性がある。  
(若杉)

#### 藤原宮期の遺構

**東面北回廊SC9490** 調査区の東部で検出した礎石建ち、瓦葺きの複廊形式の回廊である。今回の調査では、

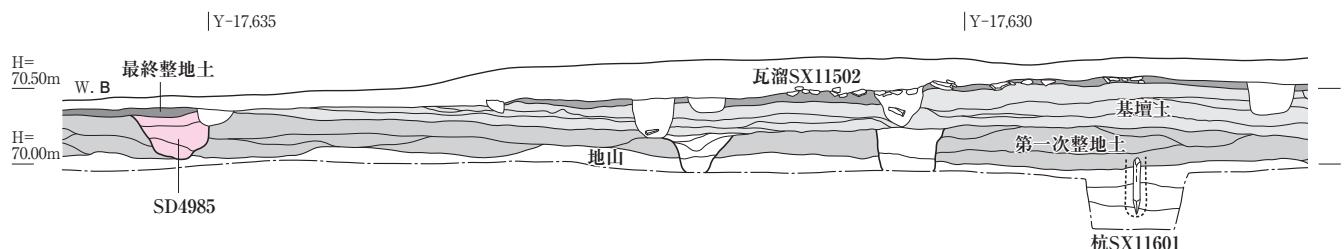


図105 東面北回廊SC9490土層図 1:50



図106 杭SX11601検出状況（土層観察用東西畦南側断面内、南西から）

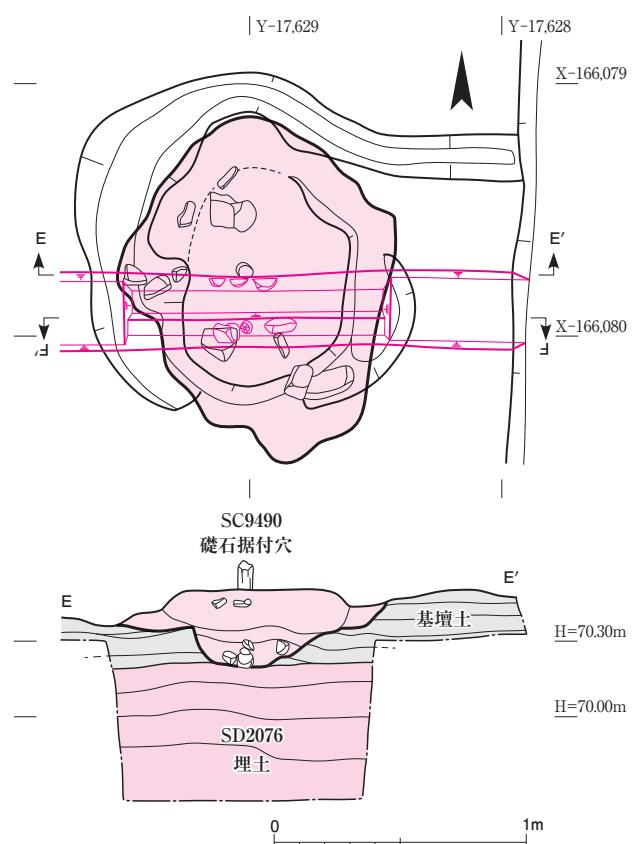


図108 東面北回廊棟通り基礎石据付穴（調査区内北から2基目）遺構図 1:30



図107 土坑SK11599検出状況（北から）

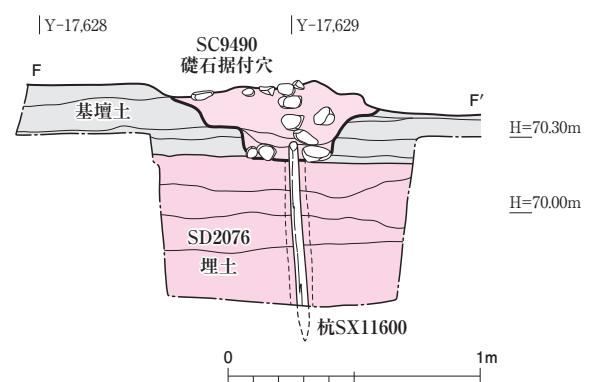


図109 杭SX11600断面図（断面位置は図108の遺構図に記載） 1:30

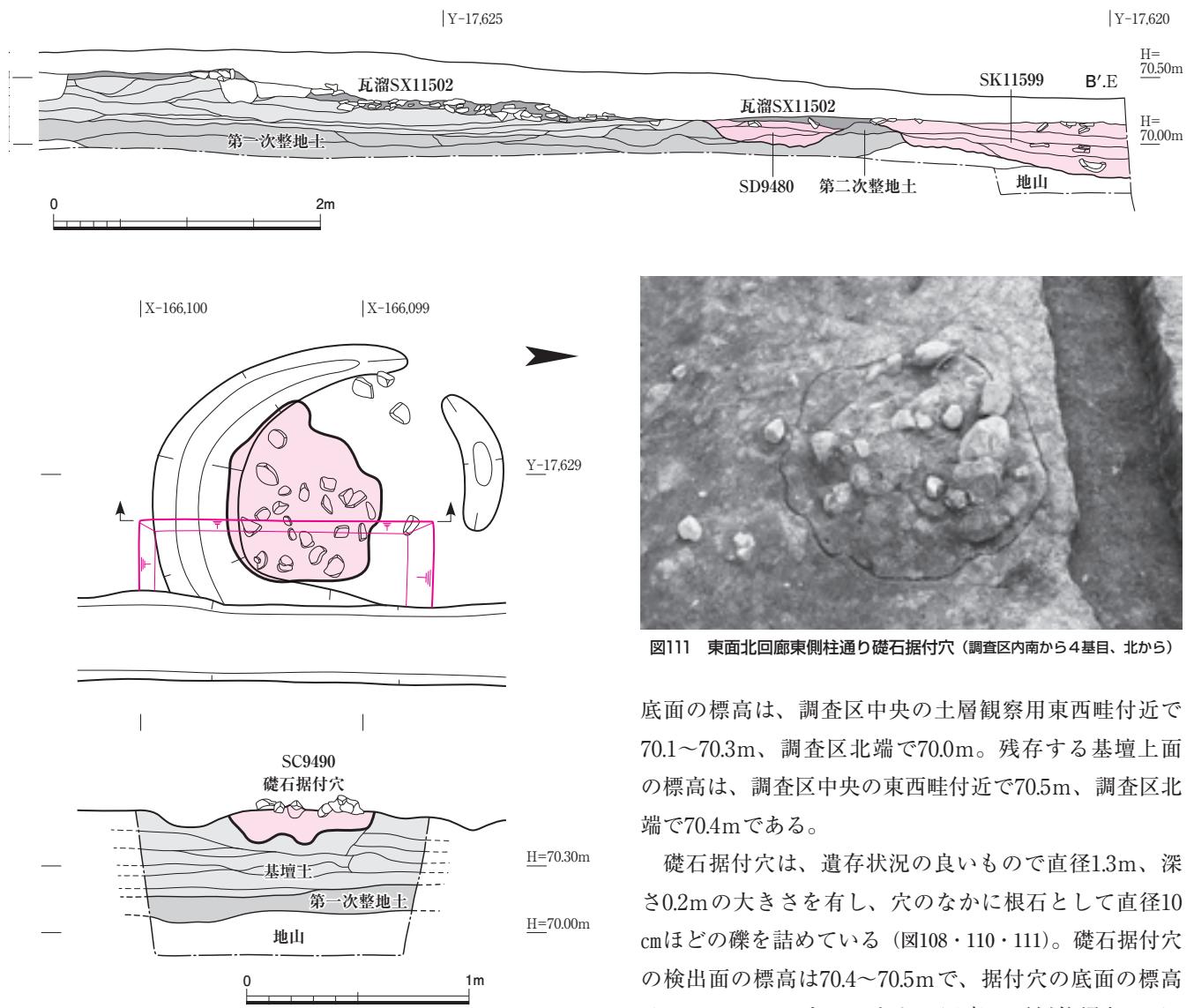


図110 東面北回廊棟通り礎石据付穴（調査区内南から2基目）遺構図 1:30

棟通りおよび東側柱通りにおいて、桁行7間分、礎石据付穴16基をあらたに検出した。柱間寸法は、桁行が3.8～4.0mで、梁行が2.9～3.0mである。梁行寸法は10尺で施工されたものと考えられるが、桁行寸法柱間については、本調査で検出した7間のうち、南から5間目の柱間寸法が3.8mを測り、13.5尺（約4.0m）で施工されたと考えるには狭い。このような遺構の検出状況を踏まえると、桁行寸法は13.0～13.5尺の範囲でいくつかの考え方ができる。

回廊基壇は橙褐色粘質土を版築状に積み上げて造成しており、一層の厚さは5～10cmである（図105）。基壇土



図111 東面北回廊東側柱通り礎石据付穴（調査区内南から4基目、北から）

底面の標高は、調査区中央の土層観察用東西畦付近で70.1～70.3m、調査区北端で70.0m。残存する基壇上面の標高は、調査区中央の東西畦付近で70.5m、調査区北端で70.4mである。

礎石据付穴は、遺存状況の良いもので直径1.3m、深さ0.2mの大きさを有し、穴のなかに根石として直径10cmほどの礫を詰めている（図108・110・111）。礎石据付穴の検出面の標高は70.4～70.5mで、据付穴の底面の標高は70.2～70.4mである。なお、回廊の西側柱通りでは、礎石据付穴などの明確な痕跡は確認できなかった。西側柱があったと推定される位置の基壇土上面の標高は70.3～70.4mで、棟通りや東側柱通りの礎石に関わる痕跡は後世の耕作により削平されたと考えられる。また、基壇外装も後世の削平や撤去により失われたとみられ、据付痕跡や抜取痕跡などは検出できなかった。ただし、回廊東方では第二次整地土の上面で凝灰岩粉の分布を確認していることから（図112）、この付近で基壇外装などに用いた凝灰岩の加工をおこなっていた可能性がある。

今回の調査により、東面北回廊SC9490のうち、大極殿後方東回廊SC11540と北面東回廊SC11510の間は12間で割り付けられることが判明した。桁行柱間寸法をいく



図112 東面北回廊東方の凝灰岩粉分布状況（南から）

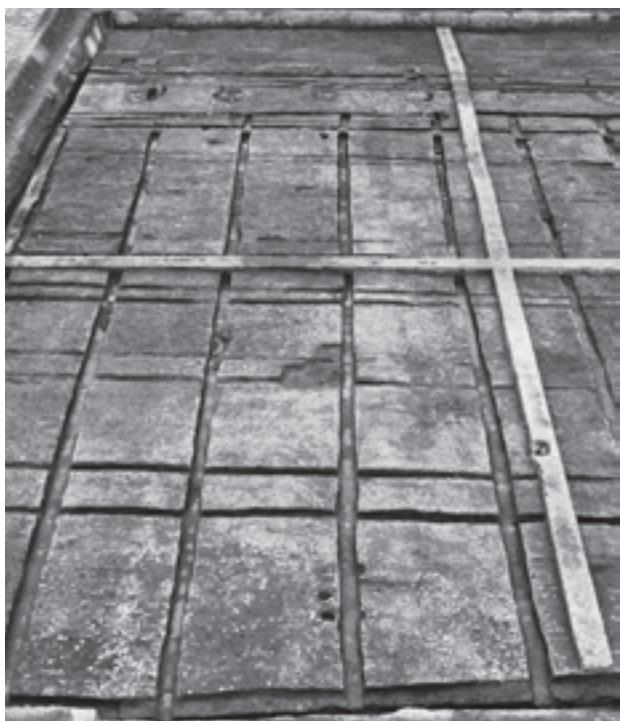


図113 磯敷SX11515検出状況（西から）



図114 東面北回廊上の瓦溜SX11502（北東から）

つとみるかは、単位尺の解釈とも関連しており、のちほど詳述するが、東面北回廊と北面回廊および大極殿後方東回廊との取付部の入隅間を等間割りしたものと考える。この場合、桁行柱間寸法は13.3…尺となり、きりの良い数値にはならない。また、対案として13.5尺の柱間と13.0尺の柱間が混在していたと考えることもできる。いずれにせよ、南面回廊および北面回廊や東面回廊のうち大極殿後方東回廊より南方の部分が、桁行14尺（約4.1m）を基本としているのとは異なる。

**礫敷SX11515** 大極殿院内庭では、直径3～15cmの礫を敷いていることを確認した（図113）。この礫敷は、今回の調査区の北西に位置する第198次調査区で検出した北面回廊の南に広がる礫敷と一連のものと考えられる。本調査区内では、西北部および先行四条条間路南側溝SD2075の上面で、礫の遺存状態が比較的良好であった。なお、今回の調査では、内庭において建物の明確な痕跡は確認されなかった。

#### 藤原宮廃絶後の遺構

**瓦溜SX11502** 東面北回廊基壇の高まりに沿って、多量の瓦が堆積する状況を確認した（図114）。基壇の高まりの西外方および東外方の瓦は、藤原宮廃絶直後に廃棄されたものが主体と考えられ、基壇上に堆積した瓦は、奈良時代以降、基壇が削平された後に敷かれたものである。第195次調査で検出したSX11502や第200次調査のSX11551と連続するものと考えられる。

**礎石移動痕跡SX11604・11605・11606** 東面北回廊棟通りの1.5～2.0m西方において、瓦溜SX11502の上面に、基壇土由来と考えられる橙褐色土が堆積し、その表面に花崗岩粉が固着している状況を3ヵ所で確認した（図115）。SX11604は南から7基目の礎石据付穴の1.8m西方に位置し、SX11605は南から5基目の礎石据付穴の1.8m西南西方に位置し、SX11606は南から3基目の礎石据付穴の2.7m西南西方に位置する（図116）。基壇が削平され、その上面に瓦が堆積した段階においても、回廊の礎石のうち、いくつかが当初位置に残っており、それらの礎石を後に移動させたことにより生じた痕跡と考えられる。

**耕作溝** 上述の瓦溜SX11502の上面では、いわゆる耕作溝を多数検出した。東面北回廊SC9490の西方では、幅0.3m、深さ0.3mの東西方向の耕作溝が3.3mほどの間隔をあけて並ぶ。これらの東西溝の東端は、SC9490の

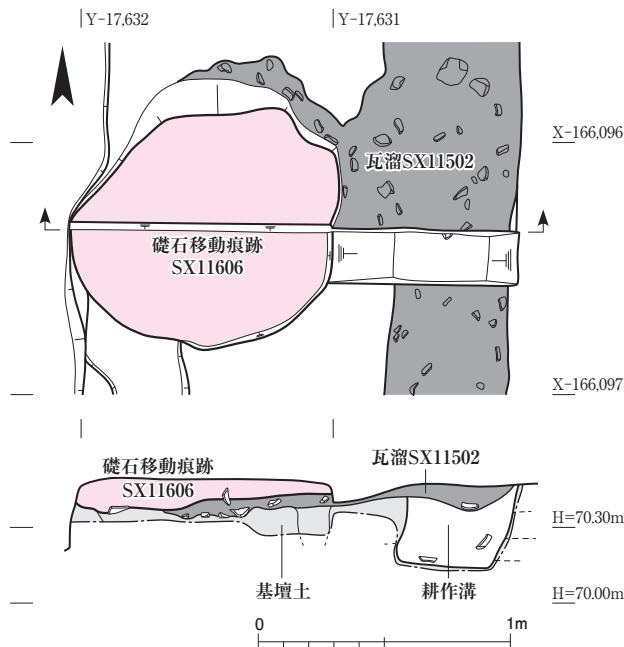


図115 基礎移動痕跡SX11606遺構図 1:30

棟通りから1.7m西方に位置する南北方向の耕作溝に合流する。この南北溝も幅・深さともに0.3mである。これらの比較的深い耕作溝は、重複関係から基壇上に堆積した瓦溜SX11502より古いことがわかり、SC9490の基壇が削平された後、それほど時間をおかずに掘られたものと推測できる。今回の調査区で確認したものと同様の東西方向の耕作溝は、第198次・200次調査区においても検出しており、大極殿後方回廊と北面回廊の間における藤原宮廃絶後の土地利用のあり方を示すものと考えられる。

(鈴木)

#### 4 出土遺物

**木製品** 瓦溜SX11502や土坑SK11599・SK11603から付札、丸棒、燃えさし、切削片、加工痕のある棒材や割裂材、木端、角材が出土した。特に切削片はSK11599下層から多量に出土している。図117は上部両端に三角形の切込みをもつほか、下部にも両側面から切込みをいれて先端を尖らせる。付札とみられるが、墨書は確認されなかった。土坑SK11603出土。残存長6.3cm、最大幅2.6cm。板目材で、樹種はヒノキである。

**獣 骨** 先行四条条間路南側溝SD2075からウマの右距骨、礫敷SX11515からウマの歯の破片が出土した（同定は山崎 健による）。



図116 東面北回廊棟通り基礎据付穴（調査区内南から3基目、奥）と  
基礎移動痕跡SX11606（手前）（南西から）

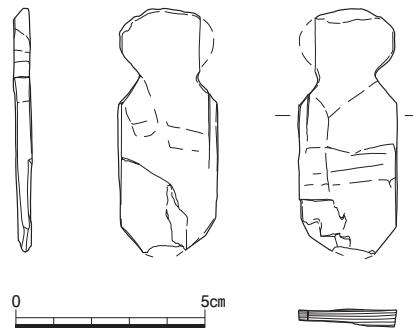


図117 第205次調査出土付札 1:2

**石製品** 調査区西辺に設けた排水溝の中央付近から滑石製勾玉が1点出土した（図118）。扁平で、全体形は緩やかな「C」字状を呈し、頭部に0.2cmの小孔を穿つ。研磨によって仕上げるが、片面・背面に整形時の削痕を残す。全長5.3cm、幅2.3cm、厚さ0.5~0.6cm。藤原宮造営以前、調査区付近に古墳などが存在していた可能性を示唆する。

**その他** このほかに、最終整地土直下や土坑SK11599、床土などから凝灰岩片（二上山産、兵庫県加古川西岸産出の竜山石）が出土している。また、先行四条条間路南側溝SD2075、土坑SK11599・SK11603から桃核、ブドウ属種子、センダン、南北溝SD11595からメロン仲間種子（マ

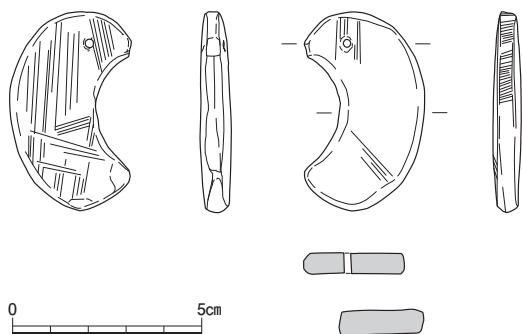


図118 第205次調査出土勾玉 1:2

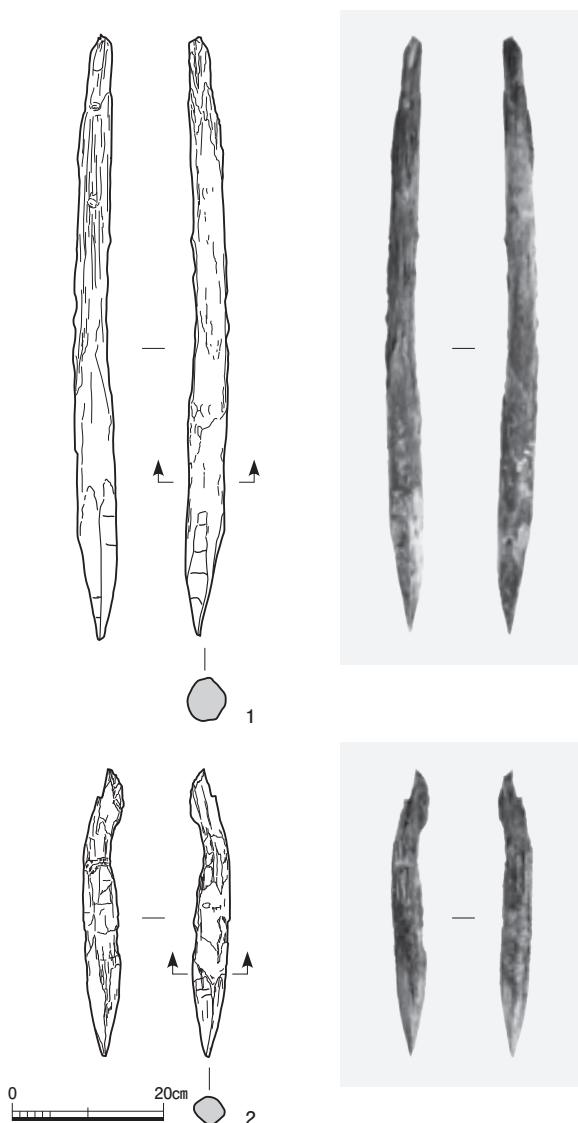


図119 杭SX11600(上)・SX11601(下) 1:10

クワ・シロウリ型)などの種実類、第二次整地土直上からサヌカイト製の石鏃1点、床土や耕作溝から水晶片、サヌカイト製の剥片や削器、鉄滓、不明鉄・銅製品が出土

した。

(松永悦枝)

**木杭** 東面北回廊棟通りの基壇下層より2点出土した(図119)。いずれも径の細い丸太材の先端を四面切り落として尖らせる。ヨキもしくは平刃のチョウナの加工痕が残る。先端部以外は樹皮が残存する。1(SX11600)は、長さ796mm、直径55mm、樹種はヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl.)。2(SX11601)は長さ374mm、直径44mm、樹種はシキミ(*Illicium anisatum* Linn.)である(ともに薄切片プレパラートの生物顕微鏡観察をおこない、樹種同定は1:星野安治、2:高橋敦/古生態研究所による)。

(大林潤)

**土器** 本調査では整理木箱23箱分の土器が出土しており、その多くが古代の土師器・須恵器である。藤原宮やその造営に関わる遺構とともに出土した土器はそれほど多くはないが、ここでは先行四条条間路の南側溝SD2075から出土した資料につき報告する(図120)。

土師器には杯A、杯C、鉢、壺A、甕など、須恵器には杯A、杯B、杯H、杯蓋、壺、提瓶、甕などがあるが、図化できたものは土師器のみである。1は杯A。口縁部残存率は10%で、口径は18.6cmに復元した。内面に二段放射暗文を施し、外面はb1手法で調整する。2は杯C。口縁部残存率は30%で、復元口径は15.8cm。放射暗文は細く密で、外面調整はa1手法である。4・5は鉢。4は口縁端部が内側に肥厚し、体部外面にはハケ目がみられる。5は内面に細い二段の放射暗文が入る。3は甕。内外面の広範囲にスス・コゲが付着する。以上のほかに、転用硯として利用された須恵器杯Bの底部や、内面に漆が付着する壺の体部も出土している。

SD2075は藤原宮造営にともない埋め立てられたとみられる。今回報告した土器の特徴は、その際に廃棄されたものと考えて矛盾はない。

(若杉)

**瓦磚類** 今回の調査において出土した瓦磚類の一覧を表16に掲げた。軒瓦の約半数が瓦溜SX11502と土坑SK11599より出土し、残りの半数は床土や耕作溝などから出土している。なお、出土した瓦が多量のため、丸・平瓦の重量計測などの作業は現在も継続中である。

軒瓦は288点出土したが、そのうち図121に遺存状態の良いものを提示した。軒丸瓦は66点出土し、1は6273B、2は6273C、3は6273D、4は6275D、5は6281A、6・7は6281Bである。軒平瓦は222点出土し、8は6561A、

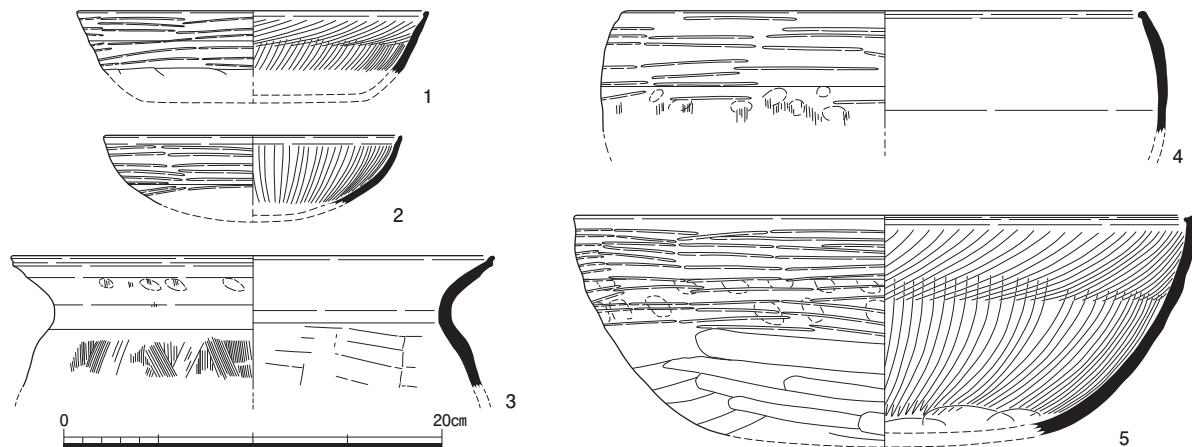


図120 先行四条条間路南側溝SD2075出土土器 1 : 4

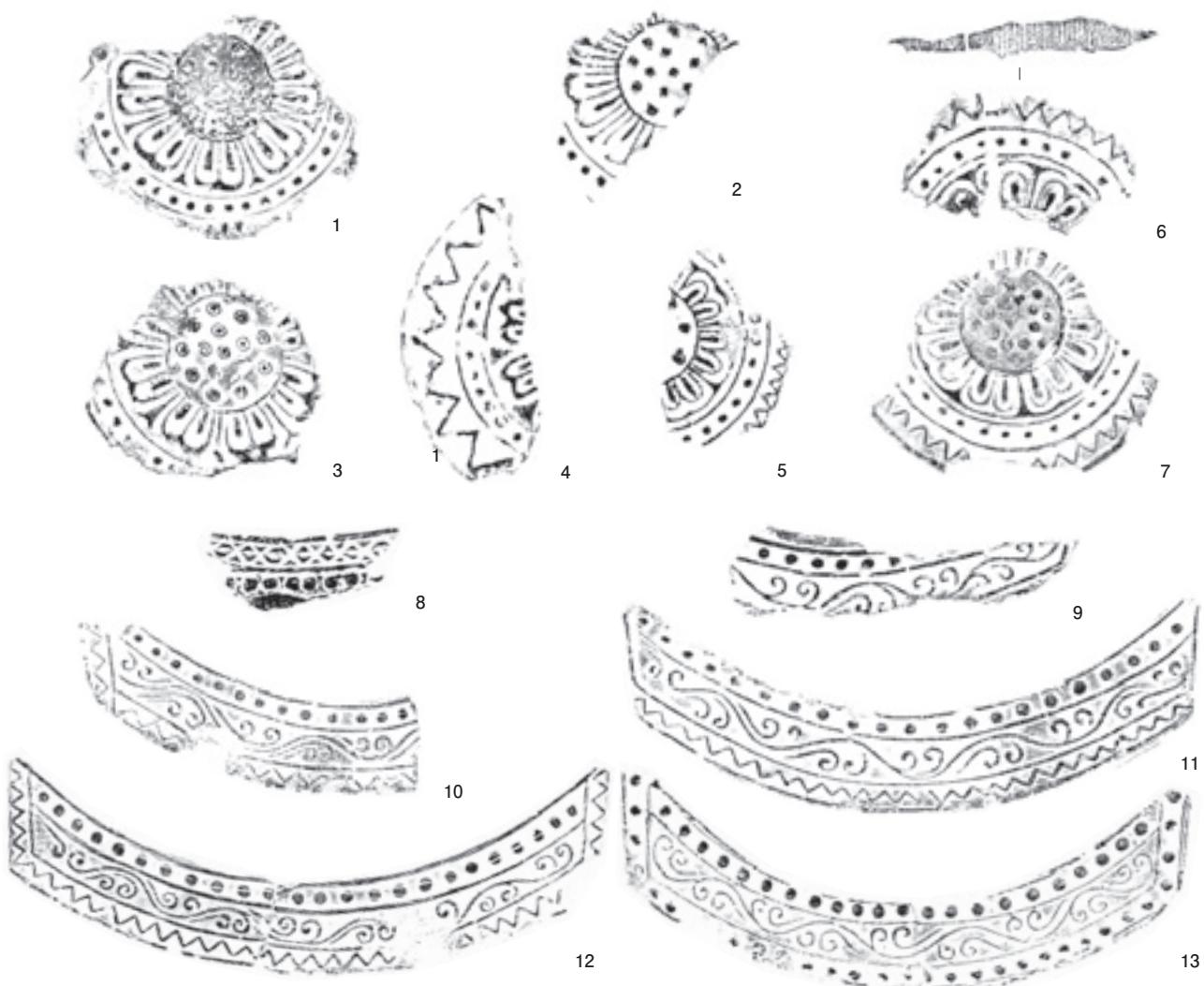


図121 第205次調査出土瓦 1 : 4

表16 第205次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6273	A	4	6561	A	1	ヘラ描き丸瓦	32
	B	12	6641	Ab	4	ヘラ描き平瓦	12
	C	5		A	3	熨斗瓦	11
	D	2		C	41	面戸瓦	5
	?	12		E	57	隅切平瓦	2
	D	2		F	76	円盤	9
6281	A	7		?	1	磚	1
	B	8	6643	C	1	不明瓦製品	92
	?	2	型式不明		38		
型式不明		12					
計		66			222		

9は6641Ab、10は6641C、11は6641E、12は6641F、13は6643Cである。このうち、1・2・4・5・8・10・13は瓦溜SX11502、7は礫敷SX11515、11は土坑SK11599から出土し、それ以外は耕作溝などから出土した。

軒丸瓦については調査区の面積に比して出土点数が少なく、型式の偏りを見出すことは難しいが、6273Bと6281A・Bの出土点数がやや多いことが指摘できる。一方、軒平瓦では6641E・Fがもっとも多く出土しており、次いで6641Cの出土点数が多い。これらのうち、6273B-6641Eは大極殿および大極殿院回廊所用瓦の主要な組み合わせであり、かつ東面回廊では6281A-6641Fが多く出土することが指摘されており<sup>3)</sup>、隣接する第195次・200次調査でも同様の傾向が確認されている（『紀要2019』・『同2020』）。

これを産地別にみると、高台・峰寺瓦窯産の6273B、6641Eと、西田中・内山瓦窯産の6281B、6641Fが多く、次いで安養寺瓦窯産の6281A、6641Cという順になり、これまでの東面北回廊SC9490の調査成果とほぼ一致する。しかし、推定大和盆地産（いわゆるJグループ）とされる6273C、6641Aa・Abの出土が少ないという特徴が見受けられ、これらJグループがまとまって出土する大極殿後方東回廊SC11540、北面東回廊SC11510とは状況を異にする。

今回出土した6281Bについては、1点のみであるが、体部に縦縄タタキを施すものが出土している（図121-6）。この特徴をもつ6281Bは第200次調査でも出土しており、同型式の中でも新しい製品にみられる技法との指摘がある（『紀要2020』）。同じく第200次調査で、6641Cの脇区上半を残す段階の個体が確認されているが、今回の調査でも2点出土しており、そのうち1点を図121の10に掲

げた。また、瓦当面に布目痕が残されているものが1点確認できた。6641Eについては57点が出土しており、細片も多いが、概ね範囲第2段階のIグループ（平瓦部凸面に横方向のナデ、段頸が明瞭）<sup>4)</sup>に属しており、明確にIIグループ（平瓦部凸面縄タタキ、段頸が不明瞭）と判断できる個体は出土していない。

なお、今回は図示できていないが、第195次調査で出土した不明瓦製品（『紀要2019』）と同様のものが、調査区東南隅を中心に92点出土している。（林正憲）

## 5 考 察

### 大極殿院回廊の規模と造営計画

今回の調査により、大極殿院回廊東半のほぼ全域の調査が終了した。ここでは、これまでの調査成果を踏まえ、大極殿院回廊の規模や造営計画について、検討する。

まずは南北の規模である。『紀要2019』では、棟通りを基準とした大極殿院回廊の南北規模として、543尺という数値を示し、本来の計画尺が550尺であった可能性を指摘した（『紀要2019』84-87頁）。ただし、これは東面北回廊の大半が未調査であった2018年度段階での案であり、大極殿院東門北妻から北面回廊南側柱までの間に15本の柱が配置されると推定し、その北端1間を13尺、残りの15間を14尺等間で割り付けたと仮定して復元を試みた<sup>5)</sup>。しかし、2019年度の第200次調査で、東門北妻から北へ約15mの位置に東西方向にのびる大極殿後方東回廊を確認し、また、今回の調査で、東面回廊のうち大極殿後方東回廊以北については、14尺より狭い柱間寸法を基本としていることがあきらかとなった。これらの調査により、『紀要2019』報告段階で15本の柱があると推定した範囲に、16本の柱が配置されることが確定し、復元に用いた柱間寸法も実際とは異なることが判明したため、本項で改めて検討を加え、一案を提示する。

東面回廊と北面回廊の接続部を調査した第195次調査では、北面回廊南側柱と東面回廊棟通りの交点に位置する礎石据付穴を確認している（図122-B地点（以下、本項で使用する座標計測点の位置は、図122を参照））<sup>6)</sup>。また、南面回廊と東面回廊の接続部については、第160次調査で両回廊の棟通りの交点となる礎石据付穴を検出している（E地点）。これらの座標値から、2地点間の南北距離（図122-⑥+⑧）を求めるとき、155.2mとなる。藤原宮・

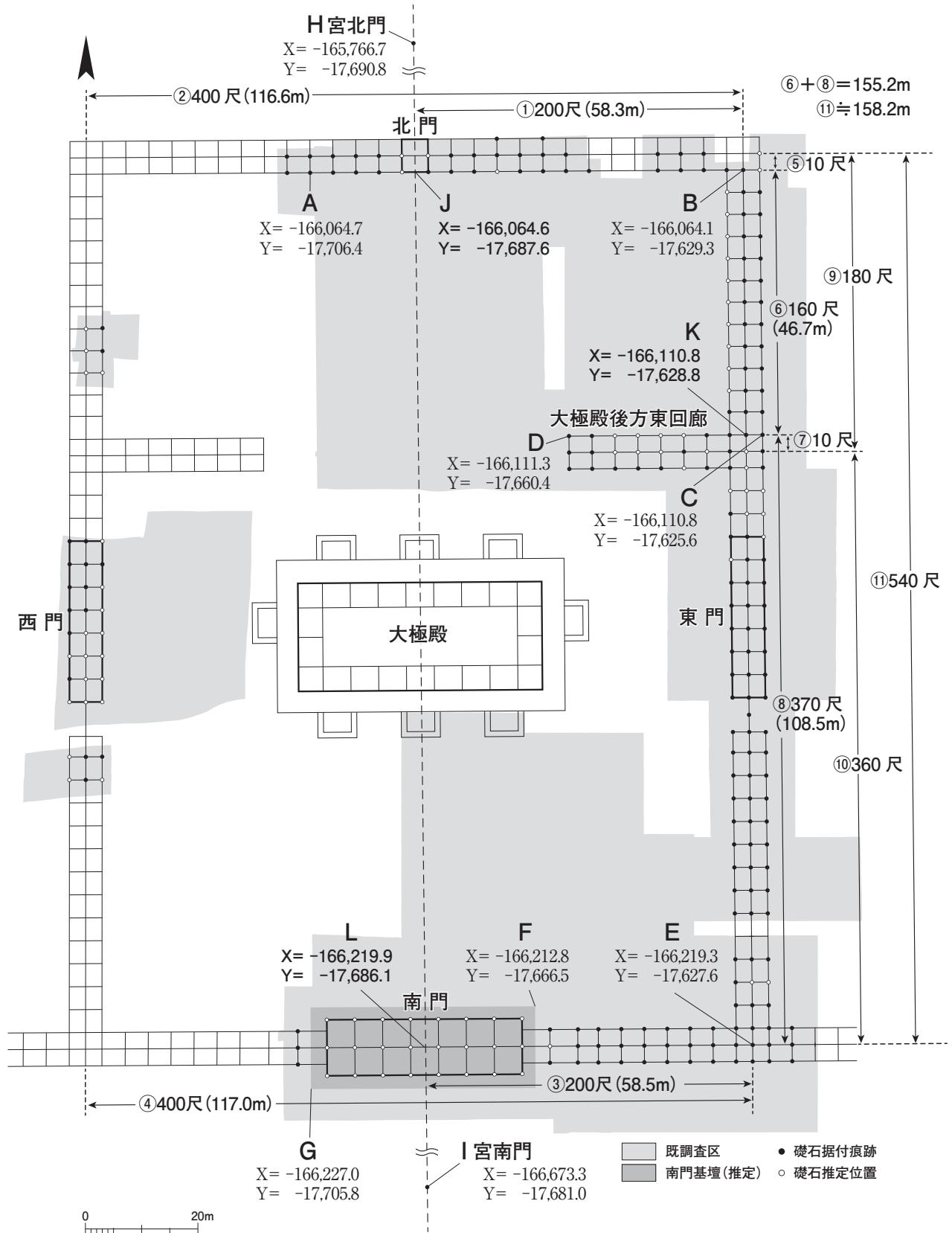


図122 藤原宮大極殿院回廊の各地点の座標および計画尺 1 : 1000

京の遺構の分析からは、単位尺として1尺=29.1~29.5cm<sup>7)</sup>の値が導き出されており、これらの単位尺で上述の155.2mを除すると、526~533尺の値を得る<sup>8)</sup>。大極殿院回廊の梁行は10尺であるため、東面回廊上における北面回廊・南面回廊の棟通り間距離(⑪)は、先ほどの数値に北面回廊の梁行10尺分(⑤)を足した536~543尺となる。この数値は、造営時の測量誤差などを含んでいると考えられるが、計画尺に近い値でその推定に有用なものである。宮の設計時に設定された計画尺は10で割り切れる完数値であったと仮定して、東面回廊の造営計画尺を求めるとき、上記の範囲のうちから、540尺という数値が導き出される。なお、⑤を3.0mとした場合、東面回廊の南北幅(⑪)は158.2mとなる。

次に、大極殿後方東回廊の位置について考えてみたい。大極殿後方東回廊の北側柱の柱筋は、第200次調査で検出した礎石据付穴のうち、輪郭のはっきりしているC地点やD地点の座標から復元が可能である。後方東回廊北側柱と東面回廊棟通りの交点(K地点)の礎石据付穴は耕作溝で一部が破壊されており、詳細な位置の把握が難しいため、ここではB・E地点を通る直線とC・D地点を通る直線の交点をK地点の座標とみなし、検討を進める。その座標値をもとにE地点からK地点までの南北距離(⑧)を算出すると、108.5mとなり、K地点からB地点までの南北距離(⑥)は46.7mである。これらを上述の藤原宮・京の単位尺で除すると、前者が368~373尺、後者が158~160尺の数値を得る。計画尺を10で割り切れる完数値と仮定し、これらの値から東面回廊の計画尺を推定すると、E-K間(⑧)は370尺、K-B間(⑥)は160尺で設計されていたと考えられ、棟通りを基準にすると、南面回廊-大極殿後方東回廊間(⑩)で360尺、後方東回廊-北面回廊間(⑨)で180尺の計画尺が復元できる<sup>9)</sup>。つまり、大極殿後方東回廊は、大極殿院東面回廊を2:1に内分する位置にくるよう設計されていたと考えられる。

続いて、東西規模の検討にうつる。北面回廊については、第195次・198次調査でその東半の柱配置があきらかとなっている。宮中軸ライン(H地点とI地点を通る直線)<sup>10)</sup>と北面回廊南側柱通り(A地点とB地点を通る直線)の交点(J地点)のY座標を求めるとき、Y=-17,687.6となり、これを北面回廊の東西心のY値とみなすと、東面回廊

棟通りからの東西距離(①)は58.3mとなる。これより、北面回廊上における東面回廊・西面回廊の棟通り間の推定距離(②)は、116.6m(=58.3×2)となる。

次に、南面回廊に関しては、第148次調査で大極殿院南門の基壇外装の抜取溝や北面階段の石材を確認しており、その基壇外装抜取溝の位置から南門心の座標値を推定した(L地点)<sup>11)</sup>。このL地点とE地点の東西距離(③)は58.5mであるため、南面回廊上における東面回廊・西面回廊の棟通り間の距離(④)は、東面回廊から南門心までの距離を2倍した117.0m(=58.5×2)に復元できる<sup>12)</sup>。これらの数値(116.6m、117.0m)を上述の単位尺で除すると、それぞれ395~401尺、397~402尺の値が得られるため、東面回廊・西面回廊の棟通り間は400尺で設計されていたと考えて問題なかろう<sup>13)</sup>。

最後に単位尺についても言及しておく。東面回廊上の南北幅B-E間(⑥+⑧)は155.2mで、これを530尺とすると、1尺=29.3cmとなる<sup>14)</sup>。また、E-K間(⑧)、K-B間(⑥)は、それぞれ108.5m、46.7mで、これらを370尺、160尺とすると、前者は1尺=29.3cm、後者は29.2cmとなる。次に、北面回廊上の東西幅(②)は116.6m、南面回廊上の東西幅(④)は117.0mにそれぞれ復元でき、これらを400尺とすると、前者は1尺=29.2cm、後者は29.3cmとなる。このように、本項で推定した計画尺と実際の距離からは、1尺=29.2~29.3cmの単位尺が導き出される。これは、従来推定されている単位尺の値とも整合的である。

以上の分析を踏まえ、図122に各点の座標と推定される造営計画尺をまとめた。回廊規模は一部の礎石据付穴や抜取溝の位置から復元した長さで、また、計画尺は幅をもった計算結果から選択した値であり、計画尺を推定する前提条件をどう立てるかにより、導き出される数値も変化しうる。しかし、大極殿後方東回廊が大極殿院東面回廊を2:1に分ける場所に正しく位置している事実<sup>15)</sup>は、大極殿院回廊の造営が厳密に計画された設計にもとづいていたことを示唆する。

(若杉)

#### 藤原宮大極殿院回廊および門の柱配置

藤原宮大極殿院回廊および門の柱配置については、これまでの各調査で柱間寸法を提示し、東面回廊南半について、「東面南回廊が桁行14尺×13間の規模をもち、20尺の取付部を挟み、桁行14尺×7間の東門が配され

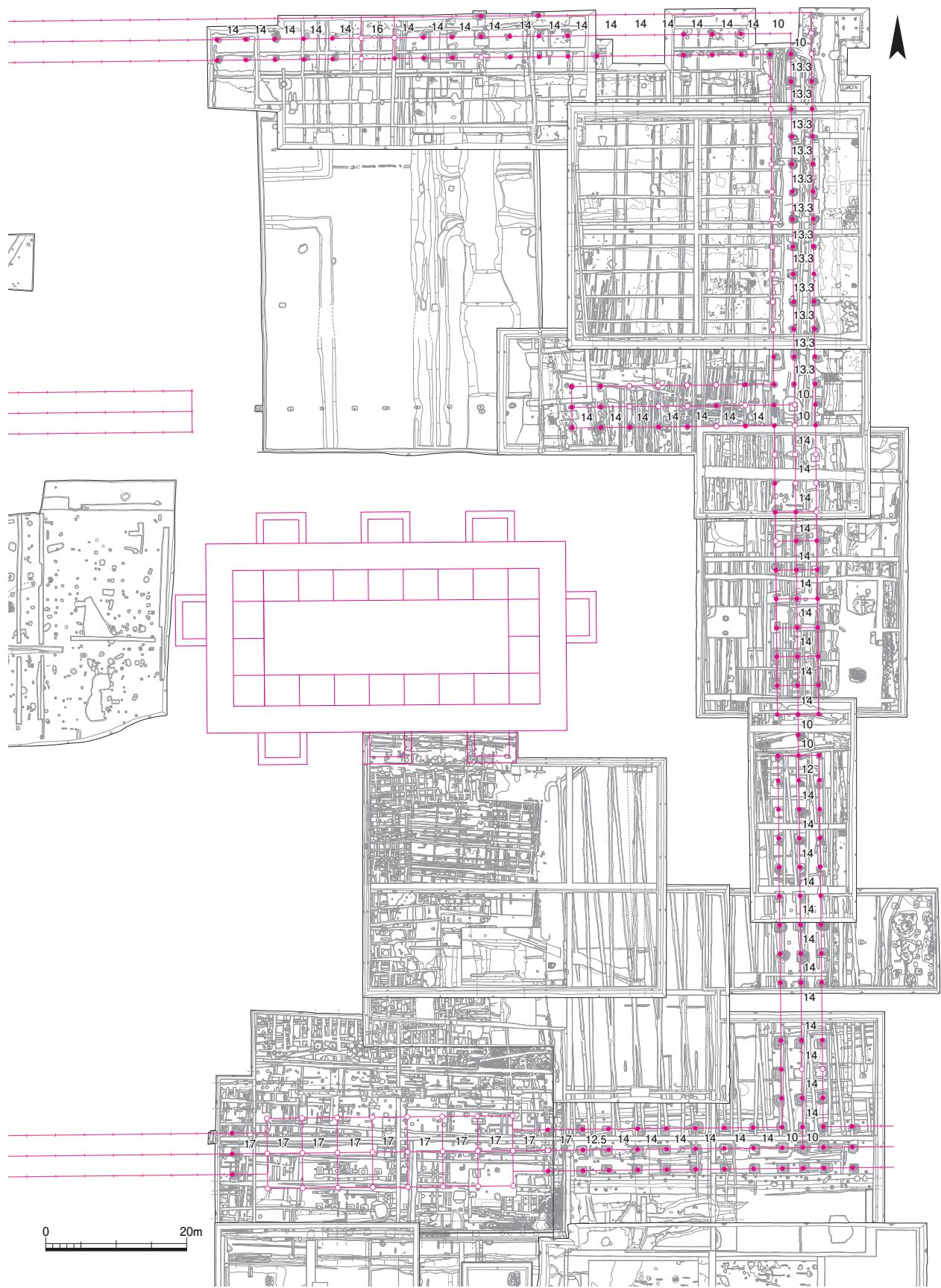


図123 藤原宮大極殿院回廊の柱配置と全体規模 1 : 800

る」(『紀要 2019』)としてきた。そして、今回の調査により東面回廊の大極殿後方東回廊以北が15間で割り付けられたことがあきらかになり、また、前項の検討結果より、大極殿後方東回廊の位置は、南北540尺を2:1、すなわち360尺:180尺に分けるように計画されたと考えられる。以上を踏まえて、ここでは大極殿院回廊東半およびこれに開く門の柱配置を提示し、造営の手順を考えたい(図123)。なお、図123で提示した数値は、図122にある東面回廊の南北幅(B-E間)から算出した単位尺(1尺=29.3cm)を用い、便宜上B-K間を等間で割り付けたとする案(後述)にて作図している。

**大極殿後方東回廊の柱配置** 大極殿後方東回廊は、東西幅34.8m(図122-C-D間)を、118尺(10尺×2間+14尺×7間)で割り付ける。

**南面回廊の柱配置** 南面回廊は、東西幅117.0m(図122-④)であり、単位尺を1尺=29.3mと考えると、399.3尺に換算できる。これを400尺で計画し、中央に桁行7間、17尺等間の南門が開き、その東西両脇各2間が17尺等間、南門の妻面から3間目のみ12.5尺、他の各6間を14尺等間で納めたと考えると、検出遺構と大きなずれは生じない。

**北面回廊の柱配置** 一方、前項で検討した通り、北面回廊は116.6m(図122-②)であり、単位尺を1尺=29.3cmと考えると、398尺となる。東面・西面回廊が取り付く入隅部間では378尺となり、これは27間14尺等間であれば、きれいに納まる数値である。北面回廊では、中央に位置する1間分の礎石据付穴のうち、南側柱通りのもの以外は削平されており、その距離は確定し難いが、この1間分が北門あるいは北門中央間と考えられる。この1間を含む中央3間分の柱間寸法は、南側柱通りで12.8mと他の桁行柱間寸法(14尺×3=42尺=約12.3m)に比較して約0.5m、つまり2尺分ほど広い。仮に、残る334尺(=378尺-44尺)を等間割りすると桁行1間は13.916…尺となり、14尺の誤差の範疇とみなすことが可能である。以上のように、多少の誤差を含むものの、北面回廊は東西幅400尺で、中央間のみ16尺、他の柱間を14尺等間で計画したと考える。

**東面回廊の柱配置** 前述の通り、東面回廊では南北を2:1に分割する位置に大極殿後方東回廊が設定されている。後方東回廊から南10間分は桁行14尺等間で割り付

けられ、このうち南寄り7間分を東門にあてている。東面南回廊は棟通り58.7m(200尺)を15間で割り付けているが、東門との取付部2間分は他より柱間が狭く、3間目もやや狭い。このような遺構検出状況を勘案し、東面南回廊は南寄り12間を14尺等間としながら、北から1・2間目を10尺、3間目を12尺で割り付けたと考えると、200尺で納まる。ただし、この場合、東面南回廊の南端3間分は検出した遺構と若干のずれが生じるので、東面南回廊の北端および南端については別の割り付け案も考えられる。なお、200尺を15間で等間割りすると、柱間寸法は13.3…尺となり、後述する大極殿後方東回廊と北面回廊の間を等間割りした場合と同じ数値となるが、検出遺構とのずれが大きいため、その案は成立し難い。

次に、今回の調査区を含む、東面回廊のうち大極殿後方東回廊以北をみると、入隅柱間距離160尺(図122-⑥)を12間で割り付けており、1間13.3…尺等間で割り付けた案や、あるいは12間のうち8間を13.5尺、4間を13.0尺で割り付けた案などが考えられる。いずれにせよ、例えば10間を14尺、2間を10尺として計160尺とするような、14尺等間を基本とし、端数調整のため、数間を狭い柱間寸法とすることで全体を納める手法をとっていないことは、大極殿院回廊の他の区画と異なる。その理由は判然としないが、大極殿院北部域の造営が南方の区画よりも遅かった可能性など、造営工程の差に起因すると考えるのも一案であろう。

(鈴木)

## 6 まとめ

**大極殿院回廊の規模と構造** 今回の調査により、東面回廊のうち、大極殿後方東回廊と北面回廊の間は12間で割り付けられており、桁行柱間寸法は14尺より狭いことが判明した。大極殿院回廊の他の区画では、14尺等間を基本とし、いくつかの柱間をそれより狭くすることで、全体の計画と整合性をつける方法を探っており、今回の調査区を中心とした東面回廊北部域の柱割り付け方法は、それとはあきらかに異なっている。これは大極殿院全体の計画や造営工程を考察・復元する上で注目すべき成果である。

**大極殿後方の区画の構造** 2019年度に実施した第200次調査では、大極殿の後方に東西方向の回廊を発見したことで、藤原宮大極殿院と前期難波宮内裏前殿区画の構造

的類似性があきらかとなった。前期難波宮では、内裏後殿の東に脇殿があることがわかつており、今回の調査では藤原宮にもそれに相当する建物が存在するかどうかの確認を調査目的のひとつとしていた。

しかしながら、今回の調査では、前期難波宮の内裏後殿脇殿に相当する明確な遺構は検出されなかつた。藤原宮大極殿院と前期難波宮内裏前殿区画は、規模や回廊の配置に類似性がみられる一方で、脇殿の有無など、建物配置には相違があることがあきらかとなった。この点は、古代宮都の構造的変遷や空間利用のあり方を考える上で重要である。

**今後の課題**　今回、大極殿院回廊東半のほぼ全域の調査を終えたことから、その規模と柱配置および造営計画について検討をおこなつた。更なる検証のためには、西面回廊の柱配置や、西面回廊と北面回廊や南面回廊、大極殿後方西回廊との交点などの位置を明確にする必要があるだろう。また、今回の調査では、前期難波宮の内裏後殿脇殿に相当する施設の明確な痕跡は検出されなかつた。今後、大極殿後方の区画を調査することで、藤原宮大極殿院の構造や空間利用などの特質をあきらかにしたい。

(鈴木・若杉)

#### 註

- 1) 足立康・岸熊吉『藤原宮址傳説地高殿の調査 二』日本古文化研究所、1941、図版87。
  - 2) 足立康・岸熊吉『藤原宮址傳説地高殿の調査 一』日本古文化研究所、1936。以下、古文化研の調査に関する引用は同文献による。
  - 3) 石田由紀子「藤原宮出土の瓦」『古代瓦研究V』奈文研、2010。
  - 4) 前掲註3。
  - 5) 543尺の内訳は、南面回廊梁行10尺、南面回廊北側柱－東門北妻間300尺、東門北妻－北面回廊南側柱間223尺、北面回廊梁行10尺である。
  - 6) 本項の検討に用いた座標値（単位：m）は、20分の1の遺構実測図から読み取った数値を基本としている。読み取りは1cm単位でおこない、図122のJ・K・Lの各地点の座標は、その読み取り値を用いて計算した。図122に掲載した座標値は、それらの読み取り値・計算値の小数点第二位を四捨五入した数値である。また、H・I地点の座標値は、『吉備池廃寺発掘調査報告』225頁（奈文研学報第68冊、2003）掲載の数値を用いた。なお、任意の二地点間の距離（①・③・⑥・⑧）は、図122掲載の数値から求めた。
  - 7) 『紀要 2004』99頁、木下正史『古代日本における度量衡制の成立・整備・展開の研究』平成19～平成21年度科学
- 研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、2010、40頁、『紀要 2017』97頁、『紀要 2019』84頁など。なお、近年の調査成果をみると、宮中枢部の回廊規模や建物配置については、単位尺に大尺（高麗尺）より小尺（唐尺）を用いて計画尺を求めたほうが整合的な数値が得られる。
- 8) 本項では、単位尺で割った数値は小数点第一位を四捨五入して示す。
  - 9) 南面回廊・大極殿後方東回廊・北面回廊の棟通り間の南北計画尺として導き出した540尺・360尺・180尺という値は、大尺（高麗尺）で計算しても450尺・300尺・150尺というきりの良い値が得られる。ただし、このことのみをもって、大極殿院回廊の造営に大尺が使用されていたと結論づけることは難しい。藤原宮造営における大尺使用の有無については、宮域各所の建物配置を総合的に分析する必要がある。
  - 10) 現時点では、藤原宮北門（H地点）と藤原宮南門（I地点）を結ぶ直線を宮中軸ラインとしておく。この直線は、（先行）朱雀大路東側溝の検出事例から導き出した回帰直線と整合性があることが確かめられている（小澤毅「藤原京条坊と寺地」『吉備池廃寺発掘調査報告』奈文研、2003）。ただし、その場合でも、宮北門・南門の実測値と、計算で求められる朱雀大路心の推定値との間には10～20cmの差がある。
  - 11) 実際の南門の基壇は、正確な長方形を呈してはいなかつたと推測されるが、施工計画上は長方形であったと推定し、基壇外装抜取溝の四隅のうち、明瞭に検出できている東北隅の溝心（F地点）と西南隅の溝心（G地点）の中点を南門心（L地点）の座標値とした。
- なお、L地点のX値（X = -166,219.9）における、宮中軸ラインのY値は-17,685.9で、朱雀大路心の推定Y値は-17,686.0である（朱雀大路心の推定座標値は、朱雀大路東側溝の検出事例から得られる回帰式で計算した。朱雀大路の回帰式については、前掲註10の小澤論文を参照）。L地点を含め、各々Y値に10～20cmのずれがみられるが、ここで扱っているデータの性質を考慮すると、大きな問題とすべき差ではない。
- 12) 北面回廊と南面回廊の東西幅の推定値に40cmの差があるが、誤差の範囲と考える。法隆寺や東大寺などの現存する寺院の回廊をみても、向かい合う回廊の幅には差があり、回廊全体が正確な矩形とはなっていない。
  - 13) この値は、『紀要 2003』84頁で既に示されており、本項ではこれを再確認した。
  - 14) 厳密な計算結果を示すと、 $155.2 \div 530 = 0.2928301\cdots$ となる。ただし、これらの基礎となっているデータは20分の1の実測図からの読み取り値であり、図上の0.5mmが実際の1cmに相当する。そのため、ここでの単位尺の記述は、0.1mmの位を四捨五入し、mmの単位までとした。
  - 15) 北面回廊や大極殿後方東回廊の梁行10尺（図122-⑤・⑦）を3.0mと仮定すると、⑨は52.7m、⑩は105.5mとなる。⑨や⑩を何尺と考えようとも、⑩の実際の長さは、⑨を2倍した数値に極めて近い。